

はじめに

今の日本に、あるいは広く世界を見渡しても、特に「地域研究論」を専門とする研究者がおられるとは思えない。

筆者自身も別にその例外ではなく、「地域研究論」について多少なりと考えをめぐらすようになったのは精々この5年たらずのことである。

それにもかかわらず、「地域研究」についての考えをここに一冊の書物にまとめるのには二つの理由がある。

その一つは、筆者自身を含めて「地域研究」者が日常的に当面する研究上の多くの問題に対し、これらをおある程度まで一般化した上で、たとえ暫定的にはあっても首尾一貫した回答を提示してみる必要を感じずからである。

「地域研究」の現状がそれを必要としているのである。

ここでは、「地域研究」の対象を現在のいわゆる発展途上諸国に限っているが、このように限定した場合でも、「地域研究」の当面する諸問題に対して一つのまとまった回答がこころみられた例はまだほとんどないのではないかと思われる。

ここで想起されるのは、アジア政経学会による1980年の『「地域研究」の新しい展開』と題するシンポジウム(後出)で、一般討論の最初に立った岡部達味が、当日の基調報告や討論を聞いても地域研究は「余りやり易くはならなかった」、大切なのは具体的な研究であり、方法の話はたまに聞くだけでよいのだと発言していることである。

同一趣旨の発言はまた石井米雄からも聞くことができる。石井は、東京外国語大学主催の「地域研究と社会諸科学」と題する1987年の国際シンポジウムでの討論者としての発言の中で、次のようにいっている。「このようなシン

ポシウムに出席することは、正直に言うと憂鬱である。なぜなら、初めから結論が分かってしまう気がするからだ。つまり議論されることは地域研究の方法論や、地域研究とディシプリンとの関係であり、地域研究は果たして可能かという問題が提起される。……そして確たる結論もなく散会するという状況が見越されてしまうのだ。このような状況を克服するには、地域研究者が、これこそは地域研究の成果であるといえる業績を提出し、それを社会科学者に批評してもらう作業がどうしても必要だと感じる。それを行う以前に、地域研究をめぐる議論を行ってもあまり実りがないというのが私の率直な気持ちである」⁽¹⁾。

岡部や石井の発言の意味は明快であり、今でもかなりの共感を呼ぶであろう。

しかし、筆者は、「地域研究」者が当面している諸問題に対して回答を与えようとするところみが時々はなされるのが、「地域研究」を深めるために、また「地域研究」を途上国問題一般の中に位置付けるために必要であると考えている。岡部や石井の発言は含蓄の多いものではあるが、一つの面を強調し過ぎているように思われる。

その場合の回答の仕方はさまざまであり、本書が唯一のそれでないことはいうまでもない。

もう一つの理由は、筆者の勤務するアジア経済研究所が1990年に創立30周年を迎えたという事情である。同研究所はいくつかの記念行事を実施中である。その一つとして、これまで同研究所でなされた「地域研究」の全面的な評価を行い、併せて今後の課題を確認するための「地域研究シリーズ」全14巻および英文別巻の出版がある。

具体的には、それは、発展途上世界の主要な地域ごとにそれぞれ1～2冊ずつ、計13冊の書物を編集し、それぞれの巻の編者がこれまでの同研究所における研究の主な流れと到達点、および今後の課題を論じた総論を執筆するとともに、その地域に関して同研究所で発表された主たる研究論文の全文ま

たは抜粋を収録してこれらの論点を明確にすることを中心とするものである。
地域別の13巻のテーマと編者は以下のとおりである。

朝鮮半島	谷浦孝雄
中国 (経済)	中兼和津次・石原享一
中国 (政治・社会)	加々美光行
東南アジア (経済)	堀井健三
東南アジア (政治・社会)	安中章夫
南アジア (経済)	佐藤宏
南アジア (政治・社会)	佐藤宏
中東 (経済)	鈴木弘明
中東 (政治・社会)	長沢栄治
アフリカ I	吉田昌夫
アフリカ II	吉田昌夫
ラテンアメリカ	星野妙子・米村明夫
ソ連・東欧	平泉公雄

これらの各巻は、それぞれがその編者による書き下ろしの総論と厳選された10数本の論文ないしその抜粋部分とから構成される。各巻の総論とそこに収録された諸論文とは、両者あいまって、当該の地域に関してこれまで同研究所でなされてきた「地域研究」の主要な成果と当面する課題とを、その全部ではないにしても少なくともその輪郭において明らかにするであろう。つまり、この総論と収録論文の両者はあい補うものとして一緒に読まれるべきものである。

シリーズはこの13巻に全体の序論の巻を加えた全14巻ならびに英文の別巻からなる予定である。英文の巻は各巻の総論の抄訳を集めたものとする予定である。全14巻は1991年から92年にかけて刊行される。筆者は、このプロジェクト、つまり「地域研究の課題と展望」研究会(平成1~2年度)の主査をつ

とめた者として、シリーズ全体の序論に当る一冊の「地域研究論」を書くことになった。それがこの書物である。

この第2の事情から、本書の内容は、アジア経済研究所における「地域研究」の歴史と密接な関連をもち、上記の研究会での討論、およびシリーズ各巻の総論やそこに収録されあるいはスペースの関係で収録し切れなかった諸論文に非常に多くを負っている。

しかし他方で、本書は、同研究所のこれまでの地域研究を総括したのではなく、また、以上の各巻の総論の最大公約数でもない。それどころか、同研究所の成果に対しても、場合によってはこれと一定の距離を置き、さらにはこれを批判している。本書が一つの体系性とそれ自体のメッセージをもつためには、それは一応はこのシリーズの各巻からはなれた独自のものでなければならなかった。

それと同時に、各巻の総論も、かならずしも本書に提示された「地域研究論」の枠組みの中で書かれるものではない。それは、ときとして本書と意見が対立することを承知の上でそれぞれの編者が自由に書く独立の論文であり、そのように呼ぶかどうかは別として、それぞれの編者の「地域研究論」がそこにうかがわれるように配慮したつもりである。したがって、このシリーズの中においてさえも、「地域研究論」は本書の一手専売ではないのである。

その意味で本書はこのシリーズの地域別の13巻と、あるいは一般にアジア経済研究所の「地域研究」の成果と、不即不離の関係にあるということが許されるであろう。

このような由来をもって出来上がった本書は、大別して三つの問題群を論じている。

第1は、地域研究、あるいはその単位となる地域とは何であろうか、ということである。これは第I部の二つの章で取り上げられる。

第2は、地域研究と社会科学一般との関係である。これは第II部の二つの章の主題をなしている。

第3は、現代の途上諸国が直面する諸問題に対して地域研究はどのような答えを見いだすのか、ということである。これは最後の第Ⅲ部の二つの章で扱うことにしている。

このような3部構成としたのは、地域研究論とは少なくともこの三つの問題群への取り組みを含むものであると思われるからである。その取り組みにどの程度まで成功したかはもちろんまた別の問題である。

なお、日本におけるこれまでの地域研究論の展開をみると、見過ごすことのできないところみがいくつかあることに気が付く。ここではその中の4点をあげておきたい。

一つは、アジア政経学会が1980年11月9日に行った前述の「『地域研究』の新しい展開」と題するシンポジウムである。これは同学会の機関誌『アジア研究』に96ページにわたって収録されている⁽²⁾。そこでは、小浪充、今堀誠二および石井米雄の3氏が基調報告をした後、それぞれについて安場保吉、平野健一郎、後藤乾一の3氏が討論し、その後で一般討論が行われている。

2番目は、同じくアジア政経学会が「アジア政経学会の30年」について行った座談会である。これには英修道、板垣與一、川野重任、石川滋、衛藤藩吉、矢内原勝、山本登の諸氏が出席している⁽³⁾。

次に、東京外国語大学が1987年11月に4日間にわたって主催した上記の「地域研究と社会諸科学」と題する国際シンポジウムがある。その成果は中嶋嶺雄とチャルマーズ・ジョンソンによる共編書『地域研究の現在』として刊行されている。

4番目に、梅棹忠夫を代表者とする「地域研究の推進の方策に関する共同研究」共同研究会がまとめた同名の報告書がある⁽⁴⁾。

これらはいずれも興味深いものであり、随時その内容を紹介し、あるいは批判してゆきたい。

最後に、本書は、筆者にとってアジア経済研究所における以下の二つの仕

事と関連があることを述べて「はじめに」の結びとしたい。

まず、同研究所の機関誌『アジア経済』がその300号に当る1986年9・10月合併号で、100号、200号につづいて日本における発展途上国研究の批判的なサーベイを行ったとき、筆者は「地域研究論」の章を執筆する機会を与えられた。これは100号と200号にはなかった項目で、その執筆は筆者にとって地域研究論の構成を考える最初のきっかけとなった。ここでは、主として、一国よりも広い範囲の地域を扱うことのメリット、一国研究と比較研究、一国を取り上げる際に留意すべき点、一国の一部を研究する意味、地域研究と歴史研究との関連などを論じている⁽⁵⁾。

次は、同研究所の情報誌『アジ研ニュース』が1987年10月号で行った「地域研究」についての特集である⁽⁶⁾。これは、同研究所の会長であった篠原三代平のほか小島麗逸、平島成望、清水学の諸氏が出席して筆者が司会した「地域研究の諸問題をめぐって」と題する座談会を中心にしたものである。

この座談会では、大別して、地域研究の方法、地域研究と途上国研究、地域の諸概念、地域研究の目的、当面の課題の五つの問題群を取り上げている。

なお、この座談会が契機となって、同誌では1988年3月号から89年3月号にかけて9人の方々による批評を「私の地域研究論」として連載した。

この二つは、いずれもささやかなものではあるが、地域研究論を体系立てようとするところみであって、本書もこれらのところみを発展させたものといえることができる。

〔注〕

- (1) 中嶋嶺雄；チャルマーズ・ジョンソン編『地域研究の現在——既成の学問への挑戦——』大修館，1989年，216～217ページ。同書はこのシンポジウムの記録である。
- (2) 『アジア研究』第28巻第3・4号，1982年1月。岡部の発言は78ページ。
- (3) 『アジア研究』第30巻第3・4号，1983年10月。後出（第2章）の衛藤の発言は24ページ。
- (4) 「地域研究の推進の方策に関する共同研究」共同研究会『「地域研究の推進の方策に関する共同研究」報告』1990年。

- (5) 山口博一「地域研究論」(『アジア経済』第27巻第9・10号, 1986年10月)。
- (6) 『アジ研ニュース』第84号, 1987年10月。

